

日時：令和5年7月31日（月）15：00～17：10

場所：A201 教室

担当：村上知子、米川祥子

参加者：太田、石野、ウエスタハウト、上野、喜多、柴田（書記）、百海、中村、三浦、水上、村上、森田、山田、米川、

欠席者：吉岡

テーマ：子どもの遊び（R7年度からの特化に向けて）

前期の授業を振り返り、多様な学生指導や退学者防止について考える

（1）学科長挨拶

すでにオープンキャンパスの際にも高校生へ紹介を開始している新特化について共有を深めることと、現在の学生に対する支援および退学者防止について考えることをしたい。

（2）子どもの遊び（R7年度からの特化に向けて） 進行：米川

担当している特化「乳児保育」の中での取り組みを紹介するとともに、この後の議論のきっかけとしてもらいたい。

保育者の構成する環境や子どもの生活の中心である「あそび」、そのあそびについてまずは保育者が熟知している必要がある。新特化では「健康・環境」「人間関係」「言葉・造形」「身体・音楽」という4つのフィールドから「あそび」にアプローチすることになる。保育所保育指針等にも「あそびを中心とした保育」という文言がある。ただそのあそびを引き出すためには、保育者の作る環境が重要になる。特化「乳児保育」では、あそびについての発達心理学的知見も入れつつ、他者との関係性もふまえたあそびの展開について考えられる学生になってほしいと思う。乳児だと傍観的行動やひとりあそびも多い。そしてその前提には、養育者や保育者とのアタッチメントの形成が重要であり、その上で子どもは安心してあそび込めることになる。そのようなことを繰り返し学生に伝えている。あそびは大人が監視するものでも、与えるものでもなく、子ども自身が世界を作っていくものである。ただ学校として保育者養成をする過程では、学生にあそびのねらいを考えさせたり、あそびの指導案を書かせたりすることになり、大人が与えるあそびという理解にもなりかねないことは留意する必要がある。特化を通して、学生にはあそびの本質について学んでもらえるようにしていきたい。

（教員の意見交換から）

世代や地域によってもあそびは変わっていく。「この時代だから」「この地域だから」とできないあそびをあきらめるのではなく、だからこそ、保育の中であそびを構成できるように保育者が考えていくことが大切。学生が体験を通してあそびを理解していくようにしていきたい。

(3) 2022年度の退学者から分析と対応策を考える

昨年度の退学者は学科合計で5名、うち1年生が4名である(2年生の退学者は死亡による除籍)。学生それぞれについて担任からの説明を受け、学業的には問題なく真面目に取り組んでいた学生や、反対に学業に取り組むことができず社会性も不足する学生もおり、退学者といってもやはり特徴は様々であることを確認した。裏を返すと、さらなる個別サポートが必要ということであり、担任を中心とした教員チームによる対応を行うことで、学生にとって何かあった際に話しやすい環境を作っていくことが重要である。また、退学者の中には男子学生も1名いる。学科の中では少数派である男子学生に対しては、クラス編成の仕方について改めて学科で検討するとともに、入学してからもこまめに声かけするなど気を配る必要がある。

